

二十一世紀をめざす大学にて

今後二十年という長期を展望した場合、わが国にとって最も基本的な課題をひとつ挙げるとすれば、何だろうか。それは、おそらく二十一世紀を担う若者たちを如何に教育していくか、また現在の教育システムをどのように変革していくかという教育の問題であると思う。国際的な場面において堂々と議論ができ、また今後一層増大する国際的な仕事を取り進めていく素養と能力をもつ個人を育成していくことは、いわば来世紀の日本人の顔を作る社会的作業である。また、それは世界の日本に対する信頼を高める上で大切な国家的戦略のひとつにもなる。

わが国の教育システムの要である大学は、近年、行政規制の緩和や青年人口の減少を背景に個性化や改革推進の動きを強めている。こうした例として慶應義塾大学の湘南藤沢キャンパス（SFC）は比較的頻繁にジャーナリズムに登場しているが、筆者は今年（一九九四年）の四月からそこでの教員の一員として加わり、日本における大学変革の動きを身をもって経験することになった。以下、このキャンパスにおける大学の思想を紹介するとともに、若干の感想を記してみたい。

明確な理念の下に設立された新学部

SFCの第一の特徴は、二十一世紀における大学のあるべき姿について明確な理念を持っており、研究や教育のプログラム、キャンパスの設計など全てがこの理念を基に作られていることである。その理念とは、国際化、情報化という環境下での二十一世紀半ばの学問は、人間社会や自然環境を最適にデザインすることが中心になるという考え方である。このため、SFCでは二つの学部（総合政策学部、環境情報学部）が置かれているが、いずれの学部でも、授業や研究においては学際的アプローチと政策的志向が発想の基本として重視される。例えば、筆者が春学期に担当した授業「金融システム・政策論」でも、単に金融論の標準的な内容の講義をするのではなく、金融の基礎知識の修得をさせるほか、国際化時代の政策課題を考えさせ、さらには金融という視点からみた日本経済の特徴をも同時に理解させるような内容とすべく、大いに工夫を凝らす必要があった。

SFCは、湘南の緑の丘陵地帯に立地するので富士山が美しく望める一方、キャンパスの中には大きな池があり、そこには数十羽の鴨が常時水に浮かんでいる。また、風向きによっては付近の畜舎の臭いが漂ってくるので、文字通り牧歌的な環境にある。そして、このキャンパスの中央には、従来の大学の図書館にあたるメディアセンターと称するモダンな建物が位置している。この建物にこうした名称が用いられているのは、知識や情報はもはや印刷物だけではなく、コンピューターなど電子的な諸手段（メディア）によって保管、伝達、利用されるという認識に基づく。現に、この建物に入ると一階には書架が無いかわりに見渡すかぎりコンピューターが並んでおり、それに向かって学生が様々な作業をしているのが印象的である（図書は二階以上に収納）。

二つの知的スキルの習得が基礎

第二の特徴は、大学教育は学生に高級な知識を伝授することにあるのではなく、学生自ら問題を発見し、その性質を解析し、そして解決策を編み出す能力を身につけさせることであるという考え方が採られており、このために欠かせない技能の習得（コンピューターと外国語の習熟）が特に重視されている点である。

コンピューターは電子文房具であるとしてこれを使いこなせる基礎技術の教育がなされる。学生が自由に使えるコンピューター端末は、合計実に約四百台も設置されている。例えば、授業関連のレポート提出については、従来のように学生が手書きしたものを事務室の窓口に出向いて届けるというのではなく、学生は資料やデータの検索とレポートの作成を殆どコンピューター上で行い、そのレポートの印刷は事務室のプリンターで行うとの指示を入力することで全て事足りる（レポートは事務室のプリンターで印刷される）という仕組みになっている。

またこのコンピューターは全世界のネットワーク（インターネット）に繋がっているため、海外との情報やデータの通信も効率的かつ瞬時に行える。例えば、米国ペンシルバニア大学の図書館には、筆者の英文著書が二冊所蔵されているといったことは、研究室のコンピューターの簡単な操作によって瞬時に検索可能である。

今一つは外国語の集中教育である。ここでは、一、二年生は週平均八時間もの外国語の授業を履する。従来の大学では、外国語はひとつの知識として扱われ、また語種も英語プラス第二外国語という考え方が大半であった。これに対しSFCでは、どの外国語を集中履修させるかについてはグローバルな視点に基づくバランス感覚を重視している（英語に特権的地位を与えていない）のが特徴である。

入学直後の学期には、諸国語概説という授業において六つの言語と文化それぞれについての入門的な興味深い解説が行われる。例えば、朝鮮語週間には授業でその言語の解説がなされるほか、朝鮮の映画や音楽の会も随所で開催され、また学生食堂ではメニューがキムチ丼など朝鮮料理になるという具合である。そうした入門講義を受けた後で、学生は履修言語を選択して決定するわけである。英語の履修希望者が当然最も多いとはいえ、その割合は四十二%であり、むしろその他の外国語の人気の高さ（仏語、独語の割合は計三十二%、中国語、朝鮮語、インドネシア語の割合は計二十六%）こそが注目される。

制度面での数多い新機軸

第三の特徴は、将来性の豊かな学生を多く集め、また教育効果を高めるための制度的工夫が数多くなされていることである。第一に、通常の入試による入学のほかに、学業に優れ積極性に富む者には自己推薦方式の入学の道を開いていることである（全入学者の二割強がこの方式で入学）。第二に、授業は通年型のものではなく、全て半年で完結することである。このため、学生が海外の高校や大学と往来する場合も容易に適応できる。

第三に、詳細な授業計画書（授業内容、使用資料、単位取得の条件等を記載）が全ての授業について配付されることである。これは、授業内容の透明性を確保するうえで重要な仕組みである。第四に、学生による授業評価が学期終了時に実施されることである。その結果は、授業の内容や進め方を改善するための有力な手段として各教員によって利用されている。第五に、学生が自由に教員の研究室に出入りして質問・相談できる時間を全教員が週二時間程度設けていることである。

これらの制度は日本の大学としては目新しい面があるが、米国等の大学ではいずれも全く標準的なものである。当キャンパスでは既にこれらの制度がよく根付いている

が、これはスタッフの殆どが海外の大学において研究・教職の経験があることによる。

以上のような新しい大学のあり方の試みに最終評価を下すには、なお時期尚早というべきであろう。例えば、果たして新しい学問体系を当キャンパスから国際的に強力に発信していけるのか、また斬新な教科課程は学生に所期の成果をもたらしているのか（第一期の卒業生を送り出したのは今春四月に過ぎない）、などまだ見極める必要のあることが多い。

ただ、当キャンパスへの見学来訪は、国内からだけでなく海外からも多いことなどから考えると、国内外の関係者に相当のインパクトを与えていることは事実だろう。またここへの入学志望者が比較的多いこと（入試偏差値は当大学内の既存学部よりも総じて高いこと）も新しい方向性が支持されている現れといえよう。

多忙ながらやりがいのある任務

このようなキャンパスで講義やゼミナールを担当するには、懸命な努力と準備が必要になる。この夏休み期間中も秋学期の新しい授業の準備や大学院の研究プロジェクトの企画に忙殺され、むしろ日銀現役時代の夏休みの方がゆとりがあったといえる状況である。また活発な活動を続ける学内の各種委員会（国際交流、データベース、図書各委員会に所属）等の仕事に割く時間も少なくなき、自分自身の研究は今のところお預け状態にある。

しかし現在の仕事には、教える側の努力が学生の反応として直接跳ね返ってくる面白さがあり（春学期の担当授業については幸い学生諸君から好意的な評価を獲得）、また二十一世紀を担う世代に対する教育ということで大いにやりがいを感じている。さらに、ここでは教職員の間関係がたいへんオープンである一方、全員が一体となってこのキャンパスをさらに発展させていこうという熱気があふれていて、とても気持がよい。時代の先端を行くこの職場での任務を全うすべく、今後一層の研鑽を積んでいきたいと思う。

（日本銀行旧友会会報「日の友」三五四号、一九九四年十月）